

「旧川復元事業実施計画」の概要
 (「茅沼地区旧川復元事業実施計画」平成18年8月、「ヌマオロ地区旧川復元実施計画」平成29年7月)

茅沼地区、ヌマオロ地区では、直線化した河道を埋め戻して旧川を復元することで、以下の効果を期待します。

- ①湿原河川本来の魚類などの生息環境の復元
- ②冠水頻度回復による湿原植生の再生
- ③湿原景観の復元
- ④湿原中心部への土砂流出などの負荷軽減



くわしくはこちら 「茅沼地区旧川復元事業実施計画」



くわしくはこちら 「ヌマオロ地区旧川復元事業実施計画」

「釧路川支川魚類生息環境の再生実施計画」の概要 (令和2年10月)

サケ科魚類の遡上環境改善に向けて、釧路川水系の支川で魚道整備を実施しています。魚類の遡上・生息環境を復元することで、それらを餌とするシマフクロウやタンチョウなどの採餌環境や湿原生態系の復元を目指します。



くわしくはこちら 「釧路川支川魚類生息環境の再生実施計画」

河川環境再生小委員会

No. 26

ニュースレター

編集・発行：釧路湿原自然再生協議会 運営事務局 発行日：令和 5年3月31日

令和5年2月9日(木)「第26回 河川環境再生小委員会」が釧路地方合同庁舎で開催されました。

■開催概要

小委員会には、25名(個人16名、7団体7名、関係行政機関1機関2名)が出席しました。今回は、「茅沼地区旧川復元事業について」、「ヌマオロ地区旧川復元事業について」、「新たな自然再生に向けた調査河川について」釧路開発建設部より報告がありました。さらに「釧路川支川魚類生息環境の再生事業について」釧路自然保護協会より報告があり、それぞれに対する意見交換が行われました。

河川環境再生小委員会とは



河川環境再生小委員会は、釧路湿原自然再生協議会の7つある小委員会の一つです。毎年1~2回の会議を開催し、河川環境の保全・再生に関わる施策について検討をしています。

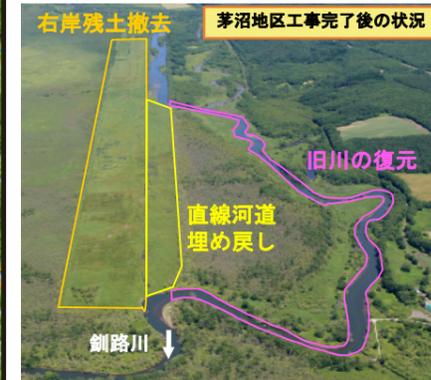
- ・釧路川や釧路川支川の本来の姿である蛇行河道の復元
- ・湿原への土砂の流入を軽減し、湿原植生の再生を目指す氾濫原の回復
- ・魚類が河川を下流から上流まで移動できる連続性の確保

河川環境再生の取り組み



釧路川とその流域

旧川復元事業



旧川復元事業では直線化された河川を元の蛇行河川に復元することで、氾濫頻度を増やし、湿原植生の回復や湿原中心部に入る土砂を軽減させます。また、蛇行河川に戻すことで、魚類の生息環境や湿原景観の復元を図ります。茅沼地区は平成23年3月に旧川の復元が完了し、令和元年度から2箇所目のヌマオロ地区の旧川復元に向けた工事に着手しています。

釧路川支川魚類生息環境の再生事業

サケ科魚類の遡上環境改善に向けて釧路自然保護協会が中心となって平成30年から釧路川水系の支川で魚道整備を実施しています。令和2年10月に実施計画を策定し、釧路湿原自然再生事業として事業を進めています。



落差工への魚道整備を実施

第26回河川環境再生小委員会[出席者名簿 (敬省略、五十音順)]

個人 [16名]

- 岩崎 理樹 [北海道大学大学院工学研究院 准教授]
- 折戸 聖 [公益社団法人 北海道栽培漁業振興公社]
- 亀山 哲 [国立環境研究所 生物・生態系環境研究センター 生態系機能評価研究室 主任研究員]
- 川西 亮太 [北海道教育大学釧路校 准教授]
- 神田 房行 [北方環境研究所 所長 (元北海道大学副学長)]
- 久加 朋子 [富山県立大学工学部環境社会基盤工学科 流域環境保全学分野 准教授]
- 櫻井 一隆
- 新庄 興
- 新庄 久志 [釧路国際ウェットランドセンター技術委員長 (環境ファシリテーター)]
- 照井 滋晴 [特定非営利活動法人 環境把握推進ネットワーク-PEG 代表]
- 野本 和宏 [釧路市立博物館]
- 針生 勤
- 平間 清 [(有)平間ファーム]
- 深津 恵太
- 吉中 厚裕 [酪農学園大学 環境共生学類 国際理解学研究室 教授]
- 渡部 哲史 [京大防災研究所]

団体 [7団体]

- 株式会社日野組 [日野 彰]
- 釧路湿国際ウェットランドセンター [元岡 直子]
- 釧路湿原国立公園連絡協議会 [元岡 直子]
- 釧路水産用水汚濁防止対策協議会 [倉地 宏樹]
- 国立研究開発法人 土木研究所寒地土木研究所寒地河川チーム [大串 弘哉]
- 国立研究開発法人 土木研究所寒地土木研究所水環境保全チーム [柿沼 孝治]
- 標茶西地区農地・水保全隊 [佐久間 三男]

関係行政機関 [2機関]

- 国土交通省 北海道開発局 釧路開発建設部 [菅野 法之]
- 釧路市 [元岡 直子]

～ 委員を募集しています ～

- 毎年10月中旬～11月初旬に釧路湿原自然再生協議会の委員を募集しています。
- どなたでも参加でき、興味のある小委員会に参加していただけます。

資料の公開方法

委員会で使用した資料および議事要旨は、釧路湿原自然再生協議会ホームページにて公開しています。

<http://www.hkd.mlit.go.jp/ks/tisui/qgmend0000003ppq.html>



ご意見募集

釧路湿原自然再生協議会運営事務局では皆様のご意見を募集しています。電話・FAXにて事務局までご連絡ください。

釧路湿原自然再生協議会 運営事務局

TEL (0154) 23-1353
 FAX (0154) 24-6839

◆ 令和4年度の取り組み

1. ハンノキ群落における湿原植生再生試験

- 旧川復元後のハンノキ群落では、ハンノキの樹皮の一部を剥ぎ取って（環状剥皮）立ち枯れさせることで、多様な湿原植生の回復を促す試験を令和元年から行っています。
- これまでの調査で、地下水位が比較的高い過湿な環境でハンノキの枯死率が高く有効であることが確認されました。
- 林床植生は旧川復元による生育状況の変化の兆候が見られますがハンノキ衰退による変化について今後もモニタリング続けていく予定です。



ハンノキの枯死状況

2022年8月10日撮影

このような意見交換が行われました。

- 環状剥皮の実施効果は明白になってきているので、本施工に移ってはどうか。 ▶ ●調査は継続し、今後湿原植生への変化を促せるよう、幌呂地区などで市民参加による普及啓発も含めて展開していきたいと考えています。
- 水位が上がったことで林床植生はスゲ類やヨシに変化してきています。今回の試験でハンノキの枯損、林床植生の変化がどこで生じているのか把握でき、再生した箇所が確認できると思います。湿原植生が回復するという成果が得られ、手法も得られたと捉えて、次に進んでいくのが良いと思います。

委員 事務局

◆ 令和4年度の取り組み

1. 工事予定

- 令和元年度から旧川復元に向けた工事に着手し、令和4年度は工事用道路の施工、左岸側旧川の掘削工事、本川への管理橋設置、右岸側の工事用道路の整備を予定しています。

2. 希少植物の移植

- 工事によって影響を受ける希少植物を保全するため、影響を受けない場所への移植を行っています。
- 令和4年度は令和元年度・令和2年度に移植した希少植物の生育状況を確認しました。移植した場所は出水による冠水・泥の堆積等により確認された種はわずかでしたが、根茎が残り次年度確認される可能性もあるため、今後もモニタリングを継続していきます。



魚類移植の状況

3. 工事に伴う魚類等の移植

- 左岸側旧川の掘削に伴い、令和3年度より水棲動物の移植作業を行っています。
- 捕獲された魚類・底生動物は止水域で生活する種、流水域で生活する種ごとに分類し、それぞれ仮締切上流側の旧川、現河道に放流しました。外来種のウチダザリガニなどは殺処分しています。



トミヨ スナヤツメ北方種

このような意見交換が行われました。

- カワシンジュガイが現況河道で見つっています。河床材料が細かいとほぼ埋まっているので、調査時に気を付けてほしいです。 ▶ ●次年度以降、移植に向けて調査を継続します。改めてご助言をいただきたいと思っています。
- 在来のキタドジョウという種がいる可能性があるため、ドジョウ全てを外来種として殺処分するのは保留してほしいです。

委員 事務局

◆ 令和4年度の取り組み

- 令和2年10月に「釧路川支川魚類生息環境の再生実施計画書」を策定しました。
- 今年度は魚道の整備とあわせてイトウやサケ・マスの産卵状況についてモニタリング調査を実施しました。
- 産卵床分布調査では、サケマスの産卵が上流域で大きく増加しました。
- イトウの個体数回復に向けて、標津サーモン科学館と協力して人工飼育による稚魚の育成も進めています。



魚道整備後（2022年現在の状況）

イトウの発眼卵の採取 標津サーモン科学館で稚魚育成

このような意見交換が行われました。

- イトウの産卵床数が2021～2022年に減少していますが、落差工の影響ではなく自然の変化なのでしょうか。 ▶ ●他水系でもこれくらいの年変動は見られます。この場所では元々産卵床の数が多くなく、かなり危険な状態のため、人間の手で増やしていくのは良いことだと思います。
- 令和3年に高水温により猿仏川でイトウが多く死亡し、令和4年の産卵床数が半分程度しかありませんでした。釧路では高水温の影響はあったのでしょうか。 ▶ ●釧路では高水温での影響は把握しておりません。

委員 釧路自然保護協会

- 新たな自然再生に向けた湿原再生検討河川として、「釧路湿原の河川環境保全に関する検討委員会」において選定された5つの河川のうち、最も湿原への土砂流入量が多い雪裡川を候補とし、新たな自然再生の調査・検討を進めることについて議論しました。



R4.9.27撮影

このような意見交換が行われました。

- 雪裡川では土砂流入対策、旧川復元のどちらを行う予定なのでしょうか。また、どのような課題が生じているのでしょうか。 ▶ ●旧川復元や久著呂地区の土砂調整地で得られたノウハウも活かして最大限の効果を得たいと考えています。上流では河床低下や土砂流出、下流側では土砂堆積が確認され、湿原区域では雪裡川の水位上昇により樹木が枯れている様子が見られました。
- 今後、調査・検討を進めるなかで、湿原内部も含めて広く状況調査をして全体を捉えた対策を検討してほしいです。水循環小委員会ではモデル開発により物理環境の変化予測ができるようになってきました。また、湿原全体の植生図を環境省で作成しているので参考にさせていただきたいです。
- 雪裡川は湧水が多くサケマスの自然産卵に適しているため、自然産卵の促進に繋がるような取組ができると多様性に繋がるので良いと思います。
- 雪裡川はタンチョウのねぐらになっており、音羽橋にはたくさんの方が訪れます。下流や芦別川にもねぐらがあるので注意が必要です。
- 雪裡川周辺の湿地はキタサンショウウオの調査がされていないので、産卵時期を逃さないように調査を行ってほしい。
- 釧路川の上流はどうなっているのでしょうか。森林を抱えたところでは土砂がたくさん出るため、上流の状況把握と、何が原因で土砂が流入しているのか調べたほうが良いと思います。
- 農地が近くタンチョウもいる雪裡川でなぜ旧川復元を行うのですか。無理して蛇行化すると農地に影響しそうです。 ▶ ●対象5河川の未対策河川のなかで、湿原流入土砂量の大きい河川として選定しました。北海道とも連携し、上流側も含めて今後の自然再生手法を考えていきます。目標についてはこれから検討して設定していきます。土砂量は水循環小委員会のなかで土砂の経年変化を算出していますので、参考にしたいと思っています。
- 何年頃の土砂流入量を目標とするのか。またその時代の湿原流入負荷がどれくらいあったのか教えてください。

委員 事務局